

教育の広場

総合学習の可能性を求めて 伸びやかな感性としなやかな社会力を

池田知隆

あれ、なんだろう？ ふと疑問が浮かんだときから、見知らぬ世界への旅が始まる。心にわき上がったその感覚を捨てることなく、答えへの入り口を探しながら、汗をかきかき「自転車漕ぎ」していく楽しさ。子どもたちの「調べ学習」のレポートを読むと、そんなワクワクドキドキしている「いのち」のときめきが伝わってくる。

日本の子どもの学力の低下に大きな関心が集まっている。「読み書き計算とい

う基礎学力がついていない」「総合学習は遊びになってしまい、学力に結びついていないのではないか」と、基礎学力の強化が叫ばれ、総合学習にも風当たりが強くなっている。

だが、昔ながらの詰め込み式の教育に戻していいはずはない。いま、一番大切なのは、子どもたちを取り巻く生活環境が大きく変わってきている中でどうすれば子どもたちの学習意欲をはぐくめるのか、ということだろう。

「調べる」学習賞コンクールから

10年前から「図書館を使った『調べる』学習賞コンクール」の審査委員をしている。NPO法人「図書館の学校」と財団法人「日本児童教育振興財団」が主催し、子どもたちが自ら課題を見つけ、調べることで創造力、思考力を養っていくという催しだ。昨年の第10回のコンクールで、小学校（3、4年生の部）で文部科学大臣奨励賞を受けたのは、千葉県袖ヶ浦市立蔵波小3年、濱崎芽生（めい）ちゃんのリポートだった。題して「しゃべるー私とお兄ちゃんのコミュニケーション」。何でも丁寧な、素直に調べていく気持ちがびんびんと伝わってきて、深く印象に残っている。

「私は簡単にしゃべれるのに、お兄ちゃんはやべれないのがずっと不思議でした」それが芽生ちゃんの疑問で、すべての始まりだった。芽生ちゃんは三兄妹の末っ子で、知的障害のある一番上の兄は養護学校高等部に通っている。

いったい人間は、いつ、しゃべれるようになるのだろうか。芽生ちゃんはまず、自分の誕生後の発達の記録をお母さんに聞くことから始めた。赤ちゃんから幼児

へと成長していくときの自分の写真を見つめ、いつからしゃべりだしたのだろうか、と振り返って考えた。図書館に行き、本を探して、脳の働き、発声の仕組みを調べた。そして調べれば調べるほど、知れば知るほど、驚きの連続だった。だけど、大好きなお兄ちゃんはやべれることができず、よくパニックに陥る。そんなお兄ちゃんの思いをどう受けとめればいいのか。

芽生ちゃんは次に、近くの養護学校にでかけた。その子どもたちや先生、父母たちと交流を始め、手話や筆談、絵記号などを学んでいった。しかし、お兄ちゃんと実際に筆談しようにも、両親たちのようにうまくできない。それは自分がすぐ怒ったりするからなのだ、と芽生ちゃんは気づいていく。

その学習過程を素直に書き綴り、100冊を超える作品にまとまった。そこには家族のきずなや芽生ちゃんのお兄ちゃんへの思いがあふれている。それを読んでいるうちに、思いやりや信頼など、「しゃべる」前の人間関係の大切さを改めて考えさせられた。

今、学校に対して自己中心的で理不尽

な要求を繰り返す「モンスター・ペアレント」といわれる保護者のことが話題になっている。国の教育再生会議などの論議では、恒例のように教師、父母、教育委員会の間で責任のなすり合いが目立つ。教育改革を声はいつまでも絶えることはないが、そんな相互不信の悪循環から抜け出せないものだろうか。ついついそんなことまで考えさせられた。

「私がお兄ちゃんといひコミュニケーションがとれるようになるためにはまず、お兄ちゃんに信用してもらうことが第一だと思いました。そんな人間になれるようにいっぱい勉強して成長していければ

海の恵み にがりを残した

はかた
伯方の塩[®]

※伯方の塩[®]は、輸入天日海塩と海水を原料に使用しています。



はかた
伯方塩業株式会社

〒790-0813 愛媛県松山市萱町4丁目4-9
TEL(089)911-4140(代) FAX(089)923-9671
ホームページ <http://www.hakatanoshio.co.jp>



いいなと思います」。芽生ちゃんの言葉はとても新鮮に響いた。

同コンクールで小学校低学年（1、2年生）の部で、同じく文部科学大臣奨励賞を受けた「どうしてねなくちゃいけないの？」もおもしろかった。芽生ちゃんと同じ千葉県袖ヶ浦市の長浦小2年、福田亮子さんのリポートだ。（ちなみに袖ヶ浦市では、市全体で「調べる」学習に熱心に取り組み、毎回、すばらしい作品をたくさん応募している）

「ちっとも眠くないのに、どうして大人は子どもに『早く寝なさい』というのだろう？」「もしも朝まで眠らなかつたら、どうなってしまうのかな？」

亮子ちゃんは、思い切って「眠らない」ことにチャレンジした。でも、眠さには勝てず、実験には失敗する。

眠りにはどんな秘密があるのだろうか。眠っている間に人間の体は神経細胞の修理をし、成長するために欠かせないホルモンを出していることを亮子ちゃんは知る。実験は失敗したけど、眠ることや太陽の光を浴びて体を動かすことの大切さを学んでいく。そんな発見の記録もとても愉快だった。

こんな多彩な応募作品をみると、本当に心の底からうれしくなる。そんな無垢な対象への接近によってこそ、人間の知性や感性や感情は磨かれるに違いない

い。そんな確信がわいてくる。

いま、「学級崩壊」や「子どもたちの『学び』からの逃避」という現象が起こり、学校は危機に立たされている。だが、「学ぶ」ことの楽しさを知れば、子どもたちは確実に伸びていく。

1990年代から始まった「ゆとり教育」をめぐる学力低下が生じさせたとの批判が渦巻いているが、自ら学び自ら考え、問題解決を図る「新しい学力観」

「楽しんで学ぶ」「賢く学ぶ」

日本の教育はいったいどうやっていけばいいのか。その指針の一つとして最近、熱い注目を浴びているのが、フィンランドの教育だ。2000年、2003年、2006年（3年ごとに実施）の経済協力開発機構（OECD）の国際的な学習到達度調査（PISA）で、フィンランドはトップの成績をあげている。かつて日本の学力は世界のトップクラスと言われていたが、それは従来の国際調査が、日本の受験などで重視されている「詰め込まれた知識量」をテストするものだったからだ。しかし、そのPISAの調査は「生涯にわたって学習する能力を身につけているかどうかをみるための指標」にし、従来の記憶力や知識量をテストす

に異を唱える人は少ない。だが、いつしか「ゆとり」が「ゆるみ」になってしまいい、子どもが『しんどい』と言ったらやらせず、読み書き計算という基礎学力を身につけさせることができているのであれば、心配になる。
基礎学力をつけるのはある程度の強制力は必要だし、その上で学ぶことは楽しいことで、人生を楽しくさせることをしっかりと教えたい。

るものとはかなり特徴が異なり、「応用力」や「自己表現力」をテストしている。これからの知識が高度化していく社会で、求められているのがその「応用力」や「自己表現力」であることは世界共通の認識になっている。

では、いったいそのフィンランドでどのような教育を行っているのだろうか。フィンランドには、日本のような学習塾や予備校はなく、受験競争とは無縁だという。高校進学は中学卒業時の成績で決まり、自分で卒業成績が低いと思えば、もう1年余計に中学へ通う。その場合でも周囲から「落ちこぼれ」と言われるどころか、むしろ「長い期間、よく勉強した」と温かく見られるという。

より快適に、さらに使いやすく！

Quality of Sound, Quality of Service
リオンネット補聴器
<http://www.rionet.jp/>

CICから耳かけ形まで
充実のラインナップ



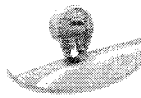
リオンネットリサ

- 言葉と不快な雑音(衝撃音)を区別し、雑音を効果的に低減するパルスノイズサプレッサー。
- 装着者の使用環境を記録・分析するデータロギングシステム。
- 音のこもり・ひびき感を大幅に解消するオープンフィッティング対応。(HI-G5R・G6R)
- 指向性機能で周囲(横や後ろ方向)の雑音を抑え、聴きたい音を聴きやすく。(HB-G5DR)
- 「おまかせ回路」のほか、使う人にやさしい「親切機能」搭載。

スーパーミニカナル (CIC)
HI-G5R

軽度 中程度 高度

228,000円 両耳価格(2台で)387,600円



耳かけ形
HB-G5DR

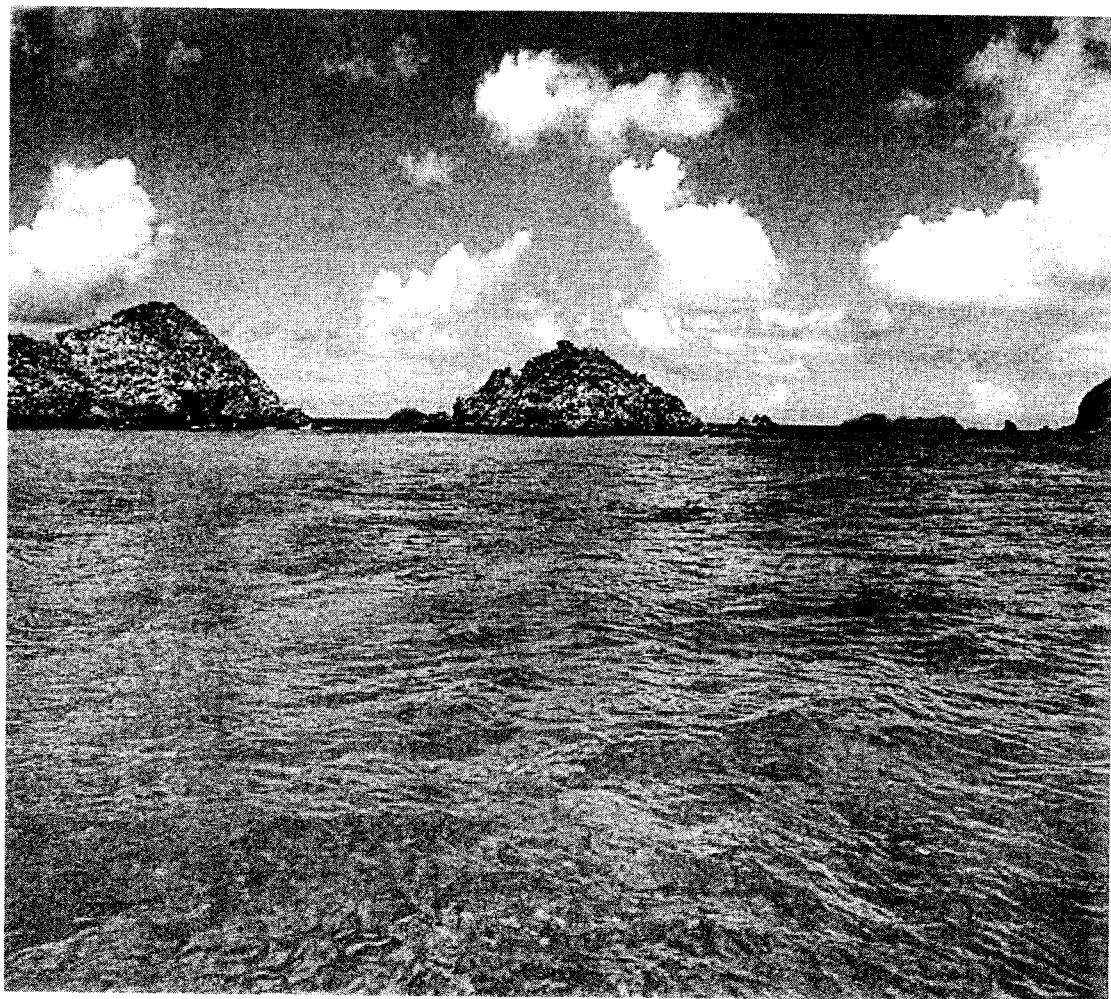
軽度 中程度 高度

168,000円



※補聴器は非課税です

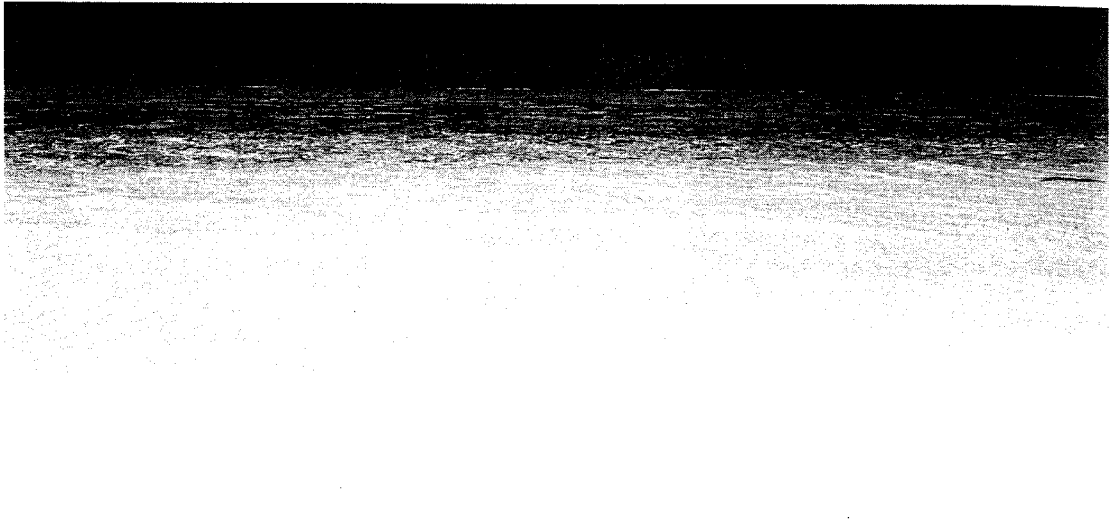
リオン株式会社



まず教育の柱は「総合教育」においている。どこに住んでも、性別や経済的な事情、母国語の違いなどには関係なく平等な教育が保障されている。国はカリキュラムの大枠で目標を定めるだけで、どうして達成していくかは、各学校の校長に委ねられている。現場での裁量権は大きく、他の学校と比べて意識的に競い合うことはしていない。

現地の教育事情に詳しい中嶋博早名誉教授などの報告によると、授業時間は日本より少ない。年間平均標準授業時間を見ると、日本の場合、7〜8歳で709時間（フィンランドは530時間）、9〜11歳で761時間（同673時間）、12〜14歳で875時間（同815時間）という（このデータは02年現在。総合カリキュラムの見直しで、日本でいう「ゆとり時間」が増やされる方向に進んでいる）そのなかでも重視されているのは国語教育であり、「読解教育」だ。「読解」といっても、それはテキストの内容を正確に理解し、解釈するだけではない。単に「読む」だけではなく、意見を表明するときの「書く」力、あるいは「話す」力という能力を育てることが求められ、それらの基本的な技能を相互に関連づけながら教育していこうとしている。

先のPISAの調査では、日本の生徒は自分の意見を論理的に述べるのが苦



手であることが明らかになっている。それは単に、日本の子どもたちが、普段から意見を書く教育を受けてこなかったことが大きな一因と思える。もちろん、欧米はどちらかといえば「弁論の文化」である一方、日本は「沈黙の文化」で、日本人は人前で自らを主張するのが苦手だという文化的な背景もあるかもしれない。だが、自らの意見をきちんと表明する力は今後、社会で生きるうえで最も大切なことは言うまでもない。

さらにフィンランドの教育で目を引くのは、教員への研修を重視していることだ。教育の基本は、人間と人間が向き合い、共に学びあっていくことだし、教員の資質が大きな比重を占めていることは無視できない。フィンランドで求められている教員像として、

- ・生徒に動機を与えることができる人
- ・ネットワークを創り出す人、またはそのメンバー
- ・組織的につくっていきける人
- ・コミュニケーションづくりやそのリーダーである人
- ・評価できる人、技術者、その専門家であること厳しい。

——などがあげられている。フィンランドの教育は確かにテスト主義・点数主義やランク付けでもないが、そこには厳しい教員のトレーニングがある。さらに

実社会と協力し合って、生徒一人ひとりの能力を高めるためのきめ細かな指導がなされている。そのことを見落としてはならない。

ひるがえって日本の現実を見ると、教員の研修はどうなっているのだろうか。決して日本の教員の質が特に低いわけではない。しかし、学校の教員を見る親の目は年々厳しくなり、特に公立学校では教師への不信が広がるばかりだ。教育改革論議もこの点には関心が集まり、昨年の法改正で09年度から教員免許の更新制が導入される。問題教員の処遇についても年々、各地の教育委員会は厳しい判断を下すようになっていく。

日本の教員もこれまで以上に、自主性、自立性が求められる、おちおちとしていられない。IT（情報技術）の活用、インターネットの利用、英語など外国語の能力など実際に使うことを想定して、その自主研修が要求されるだろう。コンピューターもさわるのも苦手で、英語も話す、聞くことはもとより読むこともさっぱりでは、教員として勤まらなくなりそうだ。年間わずか188日の授業日、また多くの公立学校へ通うことがごくあたりまえであり、標準テストで生徒や教員を追いまわすこともない。普通に授業を行ないながら、それでいて国際テストでは常にトップになっているフィンランド。子



どもたちが楽しく、ゆったりと勉強しながら、世界一の学力を維持しているのは対照的に、日本では学習塾が大はやり

伸びやかな感性を

フィンランドの教育をよくよく見れば、「生きる力」を掲げた新しい学力観にもとづいた「ゆとり教育」の理念とそうかわりはしない。だが、日本もフィンランド型の教育を目指したはずなのに、日本の「ゆとり」が「ゆるみ」となってしまうのはなぜなのか。

「総合学習をやろう」と声をかけ、いざそれを実践しようとしても、それを教える教員は自ら体験したこともない。教えなくてはいけないと思いついでいる知識の量をたくさん抱えこみ、それを少しずつ小出しにしながら、子どもたちに伝えていけばいいと思いついでいる教員も少なくない。現場からは「教員の研修が十分になされず、教材研究の時間のおかげに戸惑っている」との声が絶えなかった。

子どもはもともと自分の周りへのことについて強い好奇心をもっている。しかし、学校のなかで「どうせ私なんか」と思い込み、学習意欲を失っていく子がたくさんいる。そんな子どもたちを切り捨てな

で子どもは忙しそうなのに学力低下傾向を示している。そんな日本の教育のあり方はやはりおかしい。

いで、知的な好奇心を大きくさせるにはどうすればいいのか。

「調べ学習」は、ほとんどが資料の収集から始まる。そこで教えなければならぬのは、学問や物事の「仕組み」で、「どうやって、何を使って調べたらいいか」という大まかな手順を教え、子どもたちといっしょに情報の海を航海していけばいい。いろんな壁にぶつかり、苦しみを経験すれば、まとめ上げた時の満足感はより大きくなる。その達成感や作品を通して読み手にも伝わり、感動させる。

その一方で「教えずぎ」の危険性もある。本来は、子ども自身の興味の高まりを見つめながら、次のステップに発展できる時期をじっくりと待ち、タイミングに応じてアドバイスすべきところを、「次はこう調べます」という指示を与えてしまい、子どもたちに「やらせて」しまいかねない。

調べる楽しさ、学ぶことのときめき、それを通して、伸びやかな感性と豊かな人間性に満ちた子どもたちを大きくむこ



と。それがこれからの日本の教育においてもっと重視されなくてはいけないこと

だろう。

子どもから学ぶこと

もう10年近く前になるが、関西のある公共図書館に毎朝、通っている不登校児の話聞いたことがある。「いまは学校に行く時間ではないの？」と図書館の職員に聞かれたときのために、学籍のある小学校から「自宅外学習証」を発行して

もらっているといい、驚いた。不登校といえど、どことなく部屋にこもり、暗いイメージを抱きがちだが、その子の場合には「明るい不登校児」だ。自らの興味や関心に基づき、独自に学習するそんな子どもたちの出現に新しい時代の訪れを感じ

させられたものだ。

「いつ、どこで、どういふふうに学ぶのかは、子どもたちの権利である」という教育観も広がり、「ホーム・エデュケーション（自宅学習）」を求める親たちも少なくない。「豊かな社会において、義務教育はどこまで必要なのか」と義務教育不要論もよく聞かされるようになった。「ホーム・エデュケーション」については、子どもたちの社会性を育成していく面で不安を感じさせるが、その背後には、子どもたちのみずみずしい感性をうまくはぐくみたい、という親の切実な願いがひそんでいるのも確かだ。

自然や社会をじっくり観察し、読書に親しみながら、興味や関心にもとづき、学んでいくこと。そんな「調べ学習」はある意味で、新聞記者の仕事と同じだ。「おじさん！ ちゃんと調べて記事を書いている？」。コンクールの応募作品を見ていると、ちょっとくたびれかけた私の「自転車漕ぎ」に、子どもたちがすいすいと追って来て、声をかけてくれるようだった。

「調べ学習」や総合学習は、先生自身から、幼いころの好奇心を思い起こすことから始めてほしい。みずみずしい感性と豊かな想像力をもつ子どもたちは次々と育っている。そのことをしっかりと受け止めたい。
(毎日新聞論説委員)

NEWS ROTARY

2008

4

CONTENTS

●近づく裁判員制度③	12
不動産の賃貸事業を活用したシニアにやさしい資産運用	18
現代人のメタボ対策—食卓から健康に	22
安心の医療環境の実現をサポートする総合支援サービス	26
シワ改善に効果の高いアンチエイジングに有効な美容パック	30
姫路菓子博 2008～姫路城で花ひらく 平成の菓子文化～	34
印象のこころ—花・鳥・暮らし	48
大和文華館展観のご案内	57

REGULARS

あのとときこんなこと	38
女性ホルモンの神秘と効用	45
回虫博士の世界漫遊紀行—美しき嫌われ者たち	46
あなたと私の地震対策	49
たかが われらが日々?	52
獣医師は、なぜ、動物の言葉がわかるの?	53
どれみの鼻歌	54
世界の食べ物—チーズ③	58
京都は優雅—京焼①	62
どこで憩うか—温泉—下呂温泉の名宿	65
LIBRARY	68
4月の運勢	71
編集後記	72



表紙写真 森村 進